Esquire

ESQUIRE JAPAN N°8 December 2026

POWER OF DESIGN

時を物語る、
至高のタイムピースたち

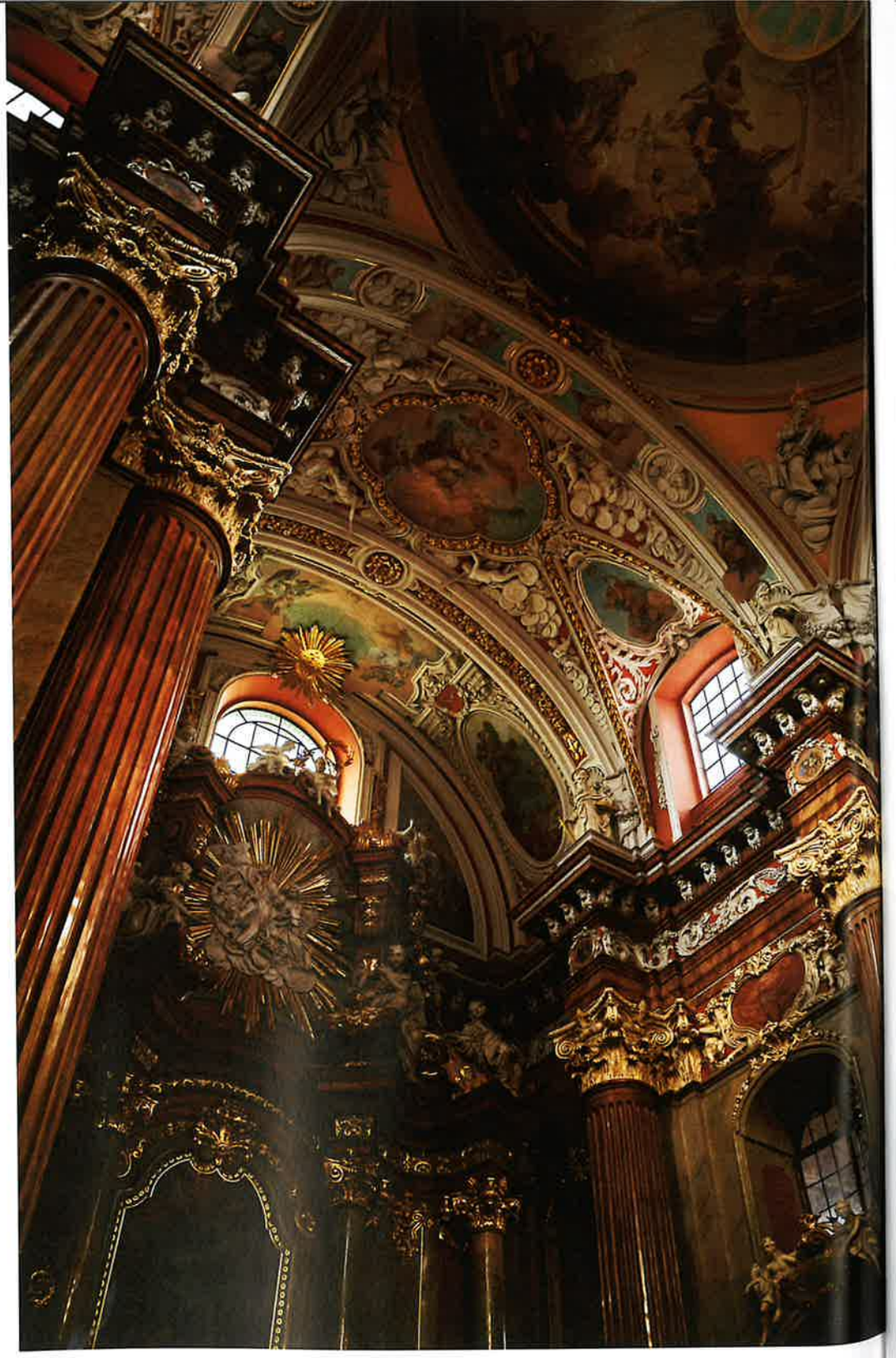
会って、触れて、つくる。
ポストコロナ世代の表現者たち

SEVENTEENのDINO、
さらなる高みへ挑む決意

坂本龍一が捉えた
日常の記憶

時代を動かす、デザインの力

Cover
山田裕貴

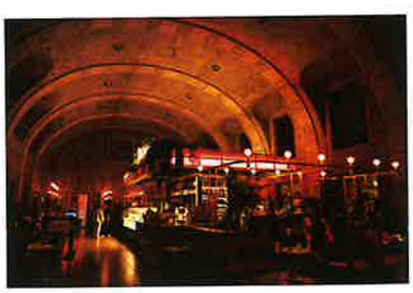


Poznań Fara／
ポズナン・ファラ（聖タニスラウス教会）

旧市街に立つ、ポーランドを代表するバロック様式の教会。イエズス会が1649年に建設を始め、中断を重ねながら完成までに50年以上を要した。身廊の両側には16本の巨大な円柱がそびえ、天井はカロル・ダンクヴァルトによる絵画で彩られる。1876年にドイツの名工ラーデガストが手がけたパイプオルガンは、毎週土曜の昼のコンサートで聴くことができる。

Restauracja Affina & Betonhaus／
レストラン アフィナ ベトンハウス

1921年から続く、ポーランド最大の国際見本市で知られるポズナン。ウィルソン公園に立つベトンハウスは、1911年の博覧会のためにコンクリートだけで建てられた展示館だ。改修を経て飲食の複合施設に生まれ変わり、2026年夏、その一角にアフィナが開店した。ミシュランガイド掲載店のチームが手がけ、イタリア料理にフランスの要素を重ねた皿が並ぶ。



歴史を着こなす街、ポズナン

旅の終着点ポズナンは、ポーランドという国が産声を上げた場所だ。ヴァルタ川のほとり、ヴロツワフと同じく「大聖堂の島」を意味するオストルフ・トゥムスキには、10世紀にこの地を治めたミェシュコ1世の居城が置かれた。2年後の968年には国内で最初の司教区が設けられ、大聖堂の黄金の礼拝堂には、ミェシュコ1世と、その息子で国王となったボレスワフ1世が眠る。いわば、国の始まりを丸ごと抱えた街なのだ。

もっとも、旧市街広場を歩けば、そんな堅苦しさはどこかへ消えてしまう。中欧有数のルネサンス建築とされる旧市庁舎では、毎日正午になると時計塔から2頭のヤギの人形が現れ、角を突き合わせる。この愛嬌たっぷりのヤギが街のシンボルなのだ。国の紋章は威厳ある白いワシなのに、建国の地の顔はヤギ。この街のおおらかさがとてもいい。

一方で、ポズナンは筋金入りの反骨の街でもある。1956年6月、工場労働者を中心とする約10万人の市民が「パンと自由を」と掲げて街頭を埋めた。当局は軍を投入して鎮圧したが、この社会主義体制下で初めての大規模な抗議行動は、のちの「連帯」運動、そして1989年の体制転換へと続く長い道のりの起点とされている。そうした気骨は、いまの街づくりにも息づく。

役目を終えた醸造所は商業とアートの拠点に、博覧会の展示館はレストランに、長く愛された書店の建物はブックカフェに。古いものを壊して建て替えるのではなく、手を入れて新しい役割を与える。街を歩くほどに、そんな今の空気をまとう歴史ある建物に何度も出合う。2026年には宝飾

Poznań

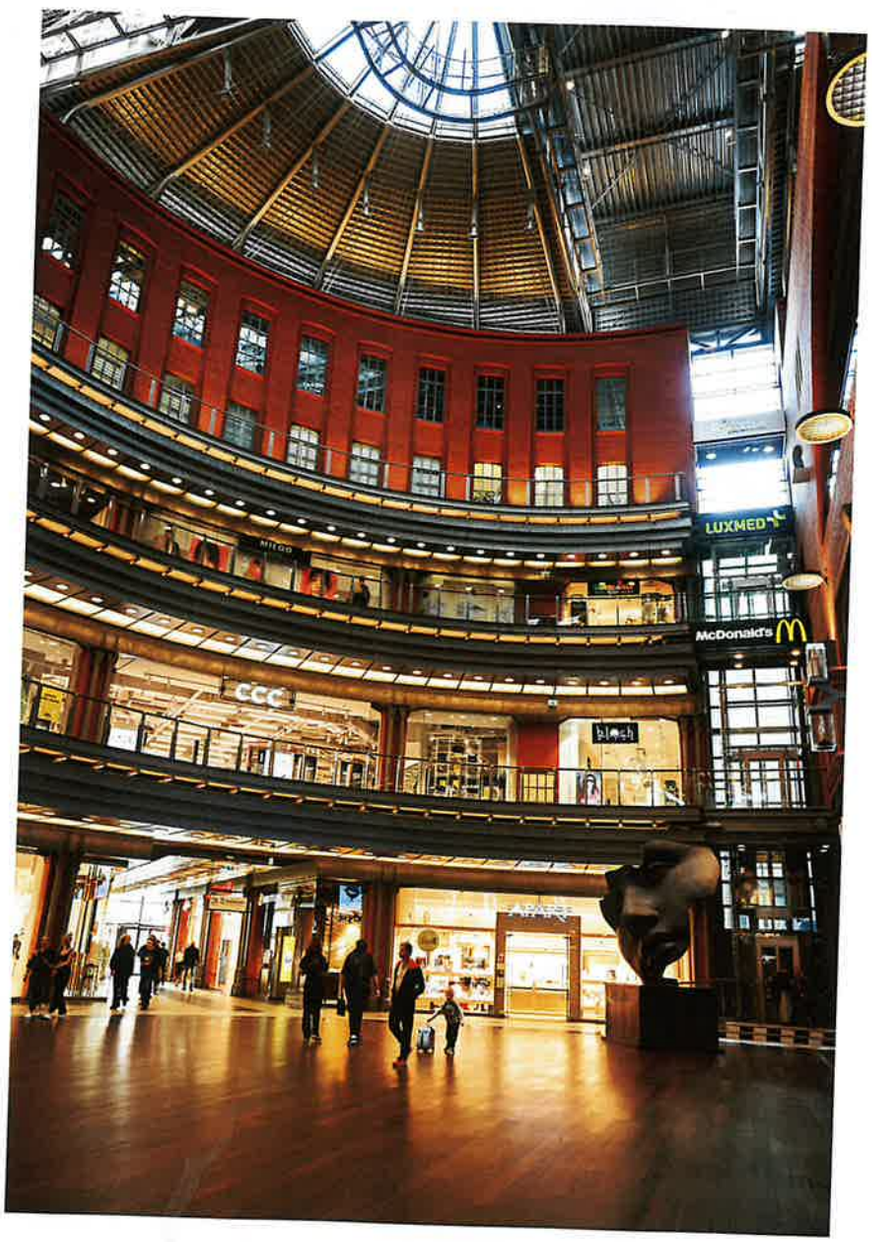
建国の地に息づく、再生の美学

MoJA Jewellery Museum／モヤ ジュエリー博物館

2026年4月開館の、ポーランドで唯一のジュエリー博物館。宝飾ブランドの共同創業者マリア・マグダレナ・クフャトキェヴィチが世界中を旅し、約30年かけて集めた、2500点のコレクションを公開。1945年以降のポーランドの現代アートジュエリー約1600点と、アフリカ、アジア、アメリカの民族装身具約900点が並び、社会主義時代の売店を再生した展示もある。

Stary Browar／スタリ・ブロヴァル

19世紀に創業したフッガー醸造所は、第2次世界大戦後に国営化され、1980年までに大規模な醸造を終えた。廃虚となった跡地を実業家グラジナ・クルチクが再生させ、2003年に開業した商業施設。ビジネスとアートを半分ずつという理念のもと、当時の工場建築を生かした館内に200を超える店が並ぶ。世界最優秀ショッピングセンターに2度選ばれており、建築な内装を楽しむだけでも訪れるかいがある。



strona／ストロナ

社会主義時代から街の書店として親しまれたモダニズム建築「ドム・クションシュキ（本の家）」の改修に合わせ、2025年に開業。1階は独立系書店とつながるカフェで、朝食からワインまで楽しめる。受賞歴を持つシェフ、パヴェウ・サラモンが旬の地元食材で料理を手がける。写真はランチの一皿で、リコッタチーズを使ったダンプリングをズッキーニとバジルのソースで。ミシュランガイドにも掲載されている。

芸術を専門に扱う博物館も開館し、新しい見どころが加わった。人口当たりの学生数が国内有数という若い街の空気も、その変化を後押ししているのかもしれない。

ヴロツワフの小人、国境をまたぐ庭園、よみがえったワインの伝統、そしてポズナンのヤギ。西ポーランドをめぐる旅で出会ったのは、何度倒れてもユーモアを忘れずに立ち上がる人々の姿だった。栓を抜いたボトルのように、この国の魅力は今、軽やかにあふれ出している。